44700247	下大窪Ａ遺跡	沼田字下大窪	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
44700248	沢田館跡	和田目字杉免	城館跡	中世	土塁・郭・切岸
44700249	阿久津権現堂遺跡	鶴野辺字広町	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
44700250	中坪遺跡	鶴野辺字中坪	散布地	奈良・平安	土師器
44700251	新屋敷一里塚遺跡	新屋敷字稲荷宮	塚	近世	
44700252	来迎原遺跡	和田目	塚	中世	一字一石経石
44700253	物見壇遺跡	和田目字田子畑	塚	奈良	弥生土器・土師器・鉄器
44700254	押切遺跡	鶴野辺字新田屋敷	散布地	奈良・平安	土師器
44700255	狸壇遺跡	鶴野辺字狸壇	散布地	縄・奈・平	縄文土器・土師器・須恵器
44700256	狐壇遺跡	鶴野辺字狐壇・米田字北山	散布地	縄・奈・平	縄文土器・弥生土器・土師器
44700257	東四十八遺跡	立石田字東四十八	塚・散布地	弥生	弥生土器・土師器・須恵器
44700258	四十八遺跡	立石田字四十八	散布地	縄・奈・平	縄文土器・土師器
44700259	呉坪山遺跡	佐賀瀬川字呉坪山	塚	中世	陶器・経筒
44700260	衣崎遺跡	佐賀瀬川字衣崎	古　墳	古墳	鉄刀
44700261	小豆田遺跡	小沢字小豆田	散布地	縄・奈・平	縄文土器・土師器・須恵器
44700262	大明神遺跡	沼田字大明神	散布地	縄文	縄文土器
44700263	下上野塚遺跡	沼田字下上野	塚	近世	古銭・経筒
44700264	上小森山遺跡	佐賀瀬川字上小森山	散布地	縄文・平安	縄文土器・土師器
44700265	土佐屋敷遺跡	佐賀瀬川字土佐屋敷	散布地	縄文・古墳	縄文土器
44700266	佐賀瀬川興隆寺	佐賀瀬川字西屋敷	社寺跡	平・中・近	
44700267	立行事長傅寺	立石田字立行事	社寺跡	中世	
44700268	田子薬師堂	新屋敷字山王塚甲	社寺跡	中世	
44700269	新屋敷常福院跡	新屋敷	社寺跡	中世	
44700270	阿久津阿弥陀寺	鶴野辺字阿久津	社寺跡	中世	
44700271	沖中田正念寺	鶴野辺字木戸東	社寺跡	中世	
44700272	米沢宝憧寺跡	米沢字西浦	社寺跡	中世	
44700273	根岸中田弘安寺	米田字堂ノ後甲	社寺跡	中世	
44700274	桧ノ目村観音寺	鶴野辺字蒲生作	社寺跡	中世	
44700275	北長尾遺跡	立石田字北長尾	散布地	縄・古～平	縄文土器・土師器・須恵器
44700276	別当平遺跡	上平字別当平	散布地	縄・奈・平	縄文土器・土師器
44700277	龍ヶ嶽城跡	上平字大舘	城館跡	中世	
44700278	梁田館跡	立石田字宮東	城館跡	中世	土塁
44700279	東長尾遺跡	立石田字東長尾	散布地	縄・奈・平	縄文土器・土師器・須恵器
44700280	館ノ山経塚	佐賀瀬川字舘山	塚	中世	陶器
44700281	入田澤館跡	沼田	城館跡	中世	
44700282	出戸田澤館跡	沼田	城館跡	中世	
44700283	物見壇館跡	和田目字澤田	城館跡	中世	
44700284	逆瀬川館跡	佐賀瀬川	城館跡	中世	
44700285	中田館跡	米田字堂の後甲	城館跡	中世	
44700286	北松沢遺跡	松沢字谷地	散布地	縄文	縄文土器
44700287	上ノ原Ｂ遺跡	藤家舘字上ノ原	散布地	弥生・平安	弥生土器・土師器・須恵器・石製紡錘車
44700288	六地蔵遺跡	字布才地	集落跡	平安	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器

（平成31年２月末日現在）

３　会津美里町の文化財等の特徴

３－１　建造物

本町には国指定の建造物が４件、県指定の建造物が３件現存します。会津盆地にあって、古くから地元山岳信仰と共に仏教文化が盛んであったことはよく知られていることですが、会津の信仰形態が確立されたのは平安時代初期のことと考えられ、少なくとも鎌倉時代から室町時代に比定され復元可能の状態とされたものが国指定建造物４件ということになります。

中でも県指定文化財である「左下り観音堂」の原型は、『左下り観音堂縁起』、『会津旧事雑考』から、延文３年（1358）の蘆名氏家臣の冨田将監祐義による修造時まで遡り得ると思われます。これは、

在地領主が社寺の修繕等を通して領地支配を行っていたことを示すと考えられ、その後、江戸時代になると、会津藩内に定められた「会津三十三観音」の札所の１つとして現在の形に改修が加えられました。

本町の建造物からは中央の国司による領地支配から、在地領主による支配へ、そして、江戸時代の寺院の宗門改による寺請制度へと変化するに伴い、建造物の維持管理のあり方が変化したことを垣間見ることができます。

左下り観音堂

3－2　彫刻（仏像）

本町の仏像を概観してみると、平安時代前期から室町時代まで各時代にわたって、すぐれた遺品を伝えていることが分かります。仏像においては江戸時代以前の遺品がどの程度伝えられているかが、その町の仏像の歴史の深さ、豊かさを物語るものといえますが、この意味で本町の仏像は奥深く、多様です。中央系、在地系、その中間的な造形の仏像と複雑に入り混じって存在しています。

福島県全体の仏像をみても、この地で仏像が造立されるようになるのは、平安時代に入ってからで、平安時代前期の遺品は、会津、中通り、浜通り各地方の限られた地域に、限られた数しか伝来していません。その一例が、この町にはあります。このことをとってみても、本町の仏像の歴史の深さがうかがえます。

木造金剛力士像

さらに本町には、国の重要文化財が４件もあります。１つの町で重要文化財が１件もないところが普通ですが、歴史的に古いのみならず、すぐれた仏像が多いことも特色のひとつであり、価値を高めているところです。また、それぞれが、大きさのある像、県内最古、あるいは特異な作例といった特徴をもっており、この町の仏像の豊かさ、多様性、特殊性を増幅させています。

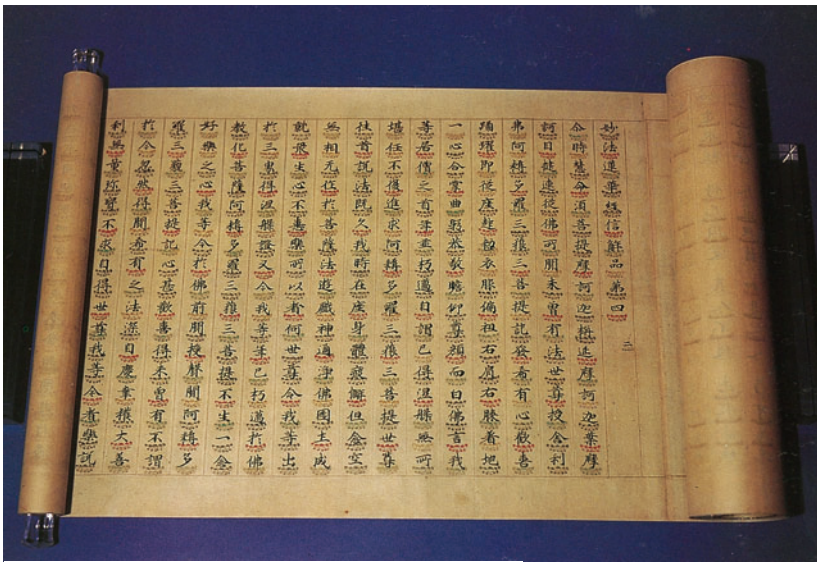
尊像の種類においては、如来では薬師如来と阿弥陀如来が中心です。薬師如来は諸病苦の消滅、衣食財宝の充足、危難救済等の現実的なはたらきをそなえ、阿弥陀如来は来世を保障してくれる如来です。菩薩では、観音菩薩と地蔵菩薩が圧倒的に多く、観音菩薩は現実的苦難からの救済を本願とし、地蔵菩薩はこの世にあって人々を救い、諸地獄の苦を除き、浄土に導いてくれます。如来、菩薩とも、現実と来世のそれぞれで人々を救済してくれる尊像が選ばれており、これは県内の尊像の種類の傾向とも一致します。

長福寺（旭杉原）の地蔵菩薩坐像の銘記中にあるように、現世の安穏と後の世の極楽往生はこの地に生きた人々の切実な願いでした。会津美里町の仏像は時代、造形、大きさ、種類、信仰等の諸相を

すべて具備しており、会津のみならず福島の仏像彫刻史の縮図ともなっています。

3－3　書跡・古文書類

本町には、国宝「一字蓮台法華経開結共」が現存します。これは県内で国宝指定が３件しかないうちの１件で、平安時代の作とされています。一字ずつ彩色した蓮華座の上に載せて写経したもので、巻によって字体が異なり、流麗な文字の美しさが特徴です。



一字蓮台法華経開結共

この他、本町には、中世から近世にかけて、会津及び本町の歴史を考察する上で貴重な古文書類が残されており、それらは町文化財として指定されています。

松沢寺には、蘆名氏を摺上原で破った後、会津を支配した伊達政宗の寄進状が残り、蘆名家以降の領地支配の一部を垣間見ることができます。

また、「田中文書四種」は、江戸時代の高田組郷頭田中家に伝わった古記録で、高田組ばかりでなく、近世会津の社会を知ることのできる重要な史料があります。

この他、山の民の文書ともいえる「狩猟文書」は山間地である東尾岐地区の個人宅で所蔵されており、狩猟の心得や山言葉等が記されています。また、会津本郷焼の産地である本郷地域には、近世の文書として窯炊きをする時の定めが記された「窯炊きの掟」も残っており、土地の産物と直結した記録として貴重なものです。

「田中文書四種」(個人蔵)（出典：『会津高田町史　第一巻』）

3－4　埋蔵文化財

遺跡（埋蔵文化財包蔵地）の分布をみると河川の形成する河岸段丘や自然堤防、これらの扇状地上に立地するものがほとんどです。

3－4－1　旧石器時代・縄文時代

旧石器時代の遺物は胄宮西遺跡、鹿島遺跡等で断片的に出土していますが、その分布の特徴については今後の遺跡の確認作業が必要です。

本町の縄文時代の遺跡の特徴として、早期・前期といった、縄文時代でも前半期の遺跡が多いとい

う点があげられます。これは会津地方の他の地域では見られない特徴ということができます。

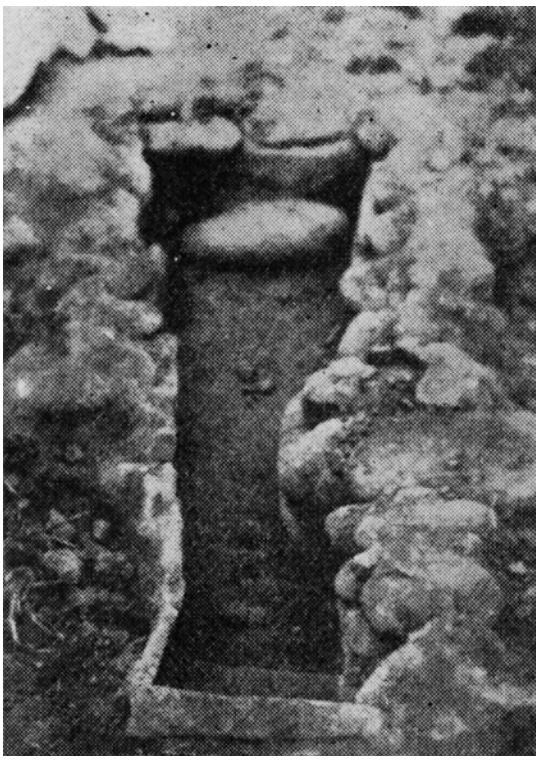
約5,500年前、近隣の沼沢火山の爆発が起こりますが、過去の１万年間を振り返っても、もっとも甚大な被害をもたらした火山災害と考えられます。沼沢火山の噴火時前後の遺跡様相をみると噴火の前後で遺跡が継続する例と噴火を期に廃絶する遺跡があることが指摘されており、噴火直後の中期初頭の遺跡が著しく減少すること、あるいは以前の立地と異なる場所に形成される例がある点も注意されています。

遺跡が多く、噴火口に近接する会津美里町のこの時期の縄文時代遺跡の分析は災害に対する縄文人の対応を知る上で、災害史の視点からも重要な意味を持つと考えられます。

3－4－2　弥生時代

弥生時代の遺跡も縄文時代と同じく盆地西・南縁の扇状地や河岸段丘、自然堤防上に立地しています。

本町の弥生時代の特徴を示すものに油田遺跡で大量に出土している打製石斧があります。その出土量の多さが際立っており、太型蛤刃石斧13点、扁平方刃石斧２点に対して、打製石斧338点が出土しています。出土量の多さは石材の原産地的な様相を示しているといえます。



長尾原の石棺（出典：『奥州会津新鶴村誌』）

3－4－3　古墳時代、奈良・平安時代

町の西北部、佐賀瀬川、長尾原、根岸、米沢にかけて佐賀瀬川横穴墓群、長尾原古墳群、根岸四八檀古墳群、米沢五つ檀古墳群等があったことが、『奥州会津新鶴村誌』に記されています。しかし、そのほとんどは開墾や圃場整備で消滅してしまいました。また、八重松から藤田にかけての丘陵地帯には10基からなる古墳時代後期の群集墳が確認されています。

奈良・平安時代になると遺跡数が増加し、上位の扇状地はもとより、より低位な扇端側にも立地するようになります。

3－4－4　中世城館

中世城館には現集落と重複、あるいは近接するものと、山岳地域に立地する山城があります。居館と戦闘あるいは逃げ込むための山城等性格の違いが想定されます。

代表的な城館として、蘆名盛氏が築城した向羽黒山城跡があります。南北600m、東西550mの壮大な城館で、その重要性から史跡に指定されています。

遺跡の立地を見ると、河岸段丘や扇状地上に営まれているものがほとんどです。特に奈良・平安時代の集落や中世の居館は現在の集落と重なり合う場合が多く、これは低位の氾濫原より水害の影響を受けにくいこと、地盤が強固であること、扇状地に特有の湧水地が生活に欠かせなかったこと等共通の立地条件があることによるものと考えられます。

3－5　民俗文化財

米どころとして古代から栄えてきた会津も、長い歴史の中では幾度となく飢饉に見舞われており、本町教育委員会が所蔵する「天明飢饉之図」には、想像を超える悲惨な状況が描かれています。

それもあって会津では各神社で「御田植祭（おたうえまつり）」が盛んに行なわれてきました。これは福島県二本松市の「広瀬熊野神社の御田植」等のように、正月に社殿や大太鼓を田に見立てて稲作の過程を模擬的に行なう「田遊び」とは異なり、田植えの時期に田植歌につれて早乙女が実際に早苗を植えて豊作を祈る神事で、東北地方には少なく、本町の伊佐須美神社と喜多方市の慶徳稲荷神社の「御田植祭」はその典型で、分布上の北限であることが分かりました。

その他にも、虫送りや早乙女踊り等稲作と関わる民俗芸能が伝わるほか、花祭りや太々神楽等の信仰と深いつながりをもつ行事も継承されているのが、本町の特徴といえます。

天明飢饉之図

3－6　自然

本町は、気候帯では冷温帯でその代表樹種はブナで植生的にはブナ帯といわれますが、ブナは現在深山にあるのみで植生分布ではコナラ、ミズナラを主とする落葉広葉樹林帯となります。

平坦地は、田畑や宅地になり河川敷を含めた周辺は河川改修等により、従来の植生とは著しく異なり、自然植生を残すのは僅かに伊佐須美神社の社叢となっています。山地は、人家に近い里山と奥山とでは、構成種が異なります。

本町の地域の文化や地域の象徴として、また、地域の自然を象徴する巨樹・名木は、神社仏閣や集落に点在しますが、私達の生活の変化や地球環境の変化等にともない衰退や枯死するものが増えてきています。

沢田稲荷神社の森

巨樹・名木も例外ではなく、その姿を変えつつあり、各集落や神社仏閣には巨樹・巨木の生育があまり見られません。各集落には防風林としてのイグネ（屋敷周りの樹木）の形成が一般的ですが、水田が広がる平坦地に点在する集落にイグネのある集落が少なく、イグネの中に巨木もほとんどありません。

また、神社仏閣では、スギ等を中心とする社叢の形成は見られますが樹齢が若く、巨樹・古木の生育がほとんど見られません。長い歴史と文化の中心であった本町だけに不思議な特徴といえます。

しかし、名木が多く生育していることが特徴で、昔から会津の名木として称されてきた桜（会津五桜）が存在します。

特に会津五桜は、『会津風土記』には、石部桜、薄墨桜がすでに古木と記されており、『新編会津風土記』には、石部桜、千歳桜、薄墨桜、虎の尾桜、杉の糸桜が名木として記載されています。さらに、その後の「高名五幅対」には、千歳桜に代わり大鹿桜が記載され、この五樹をもって「会津五桜」として発表されました。この五桜の内、本町には薄墨桜、虎の尾桜が生育しています。さらに、『会津風土記』、『新編会津風土記』、「高名五幅対」に記載されている会津の高名な桜 6 樹のうち、 3 樹が本町に生育しています。

会津は、交通不便の地ではありましたが、早くから名桜をめでてきた文化の開けた地域であったことが分かります。また、薄墨桜（伊佐須美神社）、虎の尾桜（法用寺）はサトザクラで、会津に自生している桜ではなく、オオシマザクラを基に作出された園芸種で、約350年前に遠方から持ち込まれ植えられた情熱には驚くばかりです。さらに、サトザクラの原種に近いサクラが、古くから会津に植えられていたことは、この地の歴史を語る生き証人として、また植物学上からも注目すべき特徴といえます。

米沢の千歳桜

薄墨桜

虎ノ尾桜

3－7　信仰

会津美里町における信仰形態については古代から、民間の自然崇拝形山岳信仰（修験）系、朝鮮半島からの直接渡来仏教系、奈良仏教系、真言密教系、天台密教系、神道系が混在する形で伝承されて、それぞれが独立系信仰形態を採る姿は殆ど認められておりません。江戸時代に

おいて仏門支配体制が確立された後においても、民衆の間では混在一体の形で生活に溶け込んでいたものと考えられます。特に、領国制を支えてきた惣堂（村堂）が、豊臣秀吉の会津地域における支配体制に大きな影響を与え、その後の徳川幕府の支配下にあっても、体制内自治機構として機能し続けて、どの系列にも属さない堂宇の存在が、奥会津の特徴的存在として機能し続けた背景を基にして、「信仰」を捉える必要があります。そのような中から、天海大僧正（慈眼大師）がこの地で産声を上げ得度したという伝承自体も重要な要素と捉えられます。

3－7－1　神社仏閣

本町には、延喜式明神大社である伊佐須美神社を代表として、古い由緒を持つ神社が存在します。伊佐須美神社は、『古事記』の四道将軍伝説とも結びつきを持ち、会津の総鎮守として、はじめは陸奥国と越後国の境界にそびえる御神楽岳に祀られ、そこから博士山を経て、明神ヶ岳山頂付近に遷座し、欽明天皇13年（552）に現在の地に鎮座したといわれています。

「伊佐須美神社の田植神事（御田植祭）」のように、稲作と関連した伝統文化と深く結びついています。

また、寺院については、法用寺や龍興寺を代表とする天台宗の寺院が最も多く、天海大僧正と何らかの関係があったのではないかとも考えられます。次に多いのが長福寺（永井野）や弘安寺を代表とする曹洞宗の寺院です。国・県・町の指定等文化財がこれらの寺院に多いのも特徴です。

3－7－2　山岳信仰と仏教

前述した神社仏閣のように、神社と寺院が明確に分けられるようになったのは、明治政府による神仏分離令からであり、それまでは、神道も仏教も明確に分かれることなく、深く結びついてきました。特に、本町では山岳仏教（密教）伝来当時から、修験道と仏教は深いかかわりを持ち続けてきたと考えられます。

その裏には、この地における古くからの自然信仰との結び付きを想定する必要があります。伊弉諾（いざなぎ）、伊弉冉（いざなみ）の二神を御神楽岳に祀ったといわれる『古事記』の表記や手児神社に伝わる伝承からは、本町の周辺山岳地帯には自然を畏怖する地元信仰が根強く浸透していたと推測されます。

一方、法用寺は養老４年（720）、得道（とくどう）により蓋沼の北、堂平坊ヶ沢に創建され、火災により焼失後、大同年間（806～810）に徳一により再興されたものと伝えられます。嵯峨天皇の祈願所で慧日寺開山以前は多くの末寺を持つ会津でも有力な寺院でした。

会津地域で仏教文化が花開くきっかけとなったのが、徳一（とくいつ）の活動と慧日寺の開基であると推測されます。大同元年（806）の磐梯山の大爆発により耕地が荒れ、飢饉が発生していた磐梯山麓周辺の惨状を伝え聞いた徳一は、仏教の力による人々の心の救済、山の怒りを鎮めるために大同２年（807）に会津入り、現在の磐梯町に「慧日寺」を創建し、最澄との間で一大仏教論争である「三一権実論争」を展開したことはよく知られるところです。

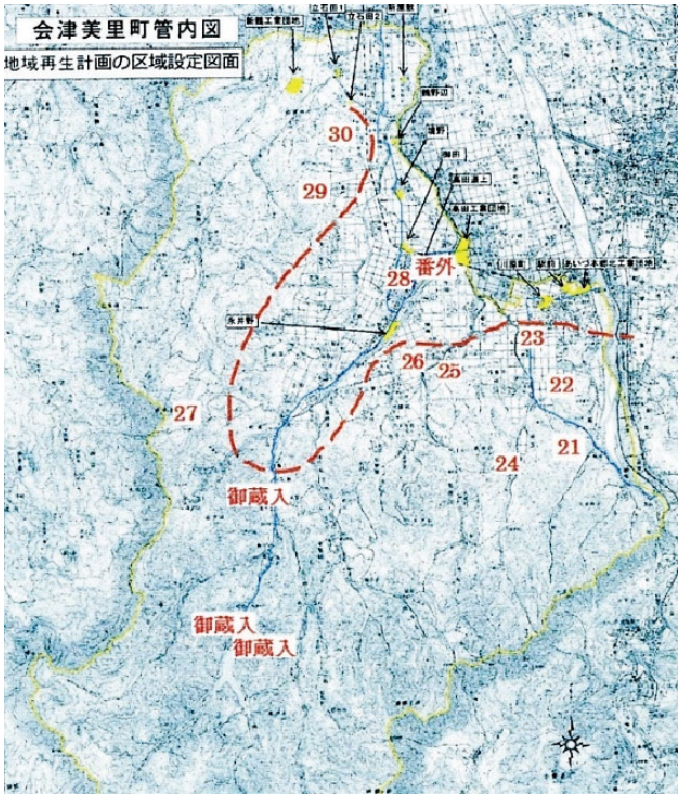
会津地方の仏教は、古代律令制下において下野を中心とした慈覚大師一門や行基の一門といった僧侶たちとのかかわりにおいて地元信仰と強く結びつきつつ独特の信仰形態を生み出しており、その後の徳一の布教活動と相まって、「仏都会津」を生み出す土壌を形成することとなったと考えられます。そして、このような信仰のもとに集落ごとにある寺院を核として、集落管理が維持されてきました。これらは、中世における寺社管理を通した在地領主による支配体制、近世初期の豊臣政権による村の管理体制の再編成、徳川幕府における寺請制度等による仏教社会の再編成、明治政府による廃仏毀釈・修験道禁止令といった、国の行政的支配・信仰的支配の大きな変遷を経ながらも、なおその基盤が壊

れることなく続いてきたことが窺えます。そして、現在においても本町の歴史文化的景観としての魅力を秘めています。

3－7－3　会津三十三観音巡りと御蔵入三十三観音巡り

33の姿に身を変えて衆生を救うといわれる観音信仰から、平安時代に始まったとされる三十三観音巡りですが、会津の三十三観音巡りは、会津藩祖保科正之により始まったとされています。寛永の頃（1624〜44）には、徳川幕府の統治により治安や経済も安定し、街道の整備も進んだことから、全国的に巡礼が盛んでしたが、巡礼のために多額の費用が領外に流れることを案じて、正之は他国への巡礼を禁止しました。

しかし巡礼は、信仰と娯楽の両面を持つことから、領民の不満を募らせずに資金や労働力の流出を防ぐため、会津藩の領内に数多く存在する由緒ある仏寺を活かし、会津三十三観音を定めたといわれます。



会津三十三観音と御蔵入三十三観音の位置図

もともと仏教が盛んであった土地柄であったことから、領民たち特に農村部の女性たちによって盛んに三十三観音巡りが行われるようになりました。家を出て羽を伸ばすことの少ない女性たちは、仲間とともに親睦と娯楽を兼ねた数日間の巡礼を楽しみました。その文化は、現在も引き継がれ、会津特有の文化として、「会津の三十三観音めぐり」が平成28年（2016）に日本遺産に認定されました。本町においても、同じ集落に嫁に来た女性たちがまとまって三十三観音をめぐる「会津三十三観音めぐり」が行われています。

また、本町には、会津藩領と御蔵入地が存在することから、会津三十三観音及び御蔵入り三十三観音の札所が存在します。

会津三十三観音に定められた観音堂は、番外も入れると11か所となり、全体の約３分の１が本町に存在します。いずれも古くからの由緒ある寺院が多く、これらは市街地よりもその周辺の山裾集落に存在し、今でも年に一度ご詠歌を歌い奉納する等、集落の集いの場となっているのも特徴です。

3－8　交通

3－8－1　会津地方における街道と阿賀川水運

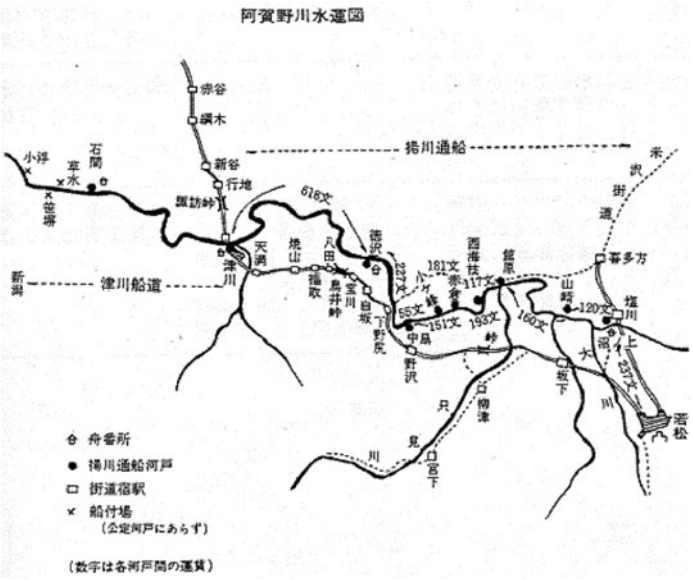
『会津風土記』によれば、この地に入る街道は、西の越後路、北の米沢路、東北の二本松路・福島路、東南の白河路、南は下野路に限られていました。

しかし、陸路は何れも厳しい峠越えが待ち受けており、交易の多くは水運に頼らざるを得なかったものと推測されます。一説によれば、「会津」とは幾つもの川（津）の合流する（会う）場所であることを意味しているといわれており、会津盆地内を流れる河川といえば阿賀川であり、最も利用しやすい水運であったと考えられます。

阿賀川水系は津川より上流域にあって大変な暴れ川でしたが、近世会津藩は借財返済のために大量

の上方廻米を京都や大阪に送らなければならず、北前船運行における風向きの状況に合わせて4月の一番船積みと6月の二番船積みに間に合うように津川船道まで運び終えるためには、どうしても塩川から津川に至る迄の揚川通船を利用しなければならないという事情がありました。

しかし、この阿賀川水運の開削は決して容易な事業ではなく、何度も挫折せざるを得なかったようで、山形の大石田から招聘された石割人足による岩を砕く等の河床整備等の結果、ようやく米廻船の免許を獲得したといいます。船底の浅い小舟を川渕の水面すれすれに設けられた綱手道を利用し船に綱を掛けて引き上げ、その綱手道の利用が叶わないような場所では、陸上に積み荷を揚げて、駄送と併用し、ようやく会津までの廻米路を確保したわけですが、決して駄送より安価であった訳ではありません。



東蒲原より会津までの阿賀川水運図
（出典：『阿賀』「津川町の水運」山崎久雄）

裏を返せば、会津盆地はそれほど他の地域から独立した、周辺からの防衛に適した地域でもあり、それ故に、他の地域とは異なった独自の文化圏を古代－中世－近世を通じて培ってきたものと考えられます。

3－8－2　会津五薬師の役割

薬師如来は諸病苦の消滅、衣食財宝の充足、危難救済等の現実的なはたらきをそなえることから、本町においても平安時代から鎌倉期にかけて薬師信仰が盛んであり、薬師仏が多く作られました。

一方、会津には「会津五薬師」と呼ばれる5つの薬師堂が存在します。『会津風土記』によると「会津五薬師」は次のように記されます。

野寺薬師堂・漆峯薬師堂・大寺薬師堂・調合寺薬師堂・勝常寺薬師堂

この中の野寺薬師堂は会津郡、漆峯薬師堂・大寺薬師堂（慧日寺薬師堂）は耶麻郡、調合寺は河沼郡というようにそれぞれに薬師仏を安置し、さらに中央薬師として河沼郡の勝常寺薬師堂が位置付けられたものと考えられます。

これらの薬師堂は、信仰の対象であることに加え、会津盆地への主要な陸路沿いに安置されていたと考えられ、野寺は下野路、漆峯は米沢路、大寺は福島路・二本松路、調合寺は越後路を守り、会津盆地で合流する水路を総合的に掌握していたのが勝常寺中央薬師であったと推測されます。

会津五薬師の位置（昭文社地図に加筆）

3－8－3　本町における街道と連絡路

本町を通る主要街道は下野街道のみですが、本町は、下野街道と越後街道を結ぶバイパスの役目を担う脇街道が通り、また上野・下野・越後から会津盆地に入るために最後に越えなければならない峠越えの場所でした。これは会津盆地側からいえば、最後の守りとなりえる要衝の地ともいえます。

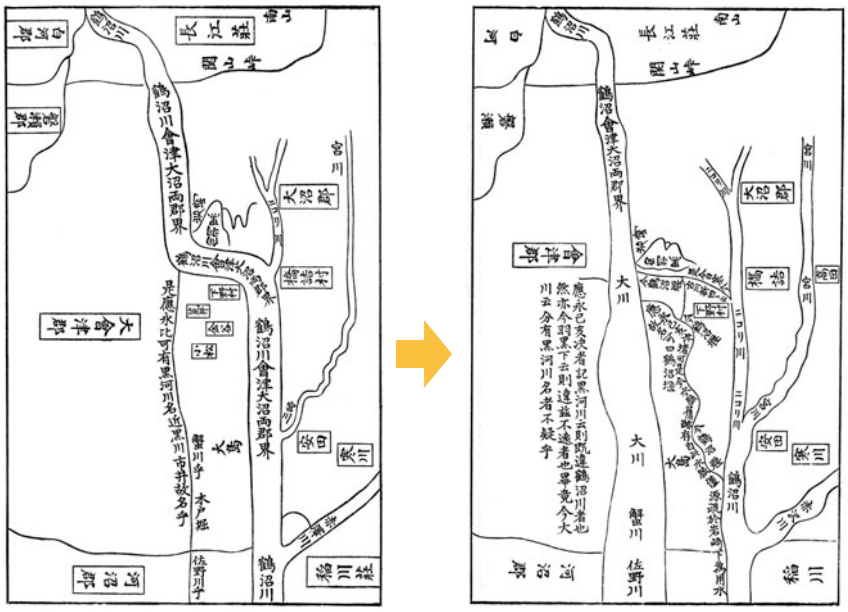
大町（会津若松市）を起点とした下野街道は、本町の本郷地域大八郷、関山をとおり氷玉峠を越して大内へ至ります。高田地域の藤田・高田は下野街道と越後街道をつなぐ脇街道の宿駅として賑わいました。

この他、高田から博士峠を越えて昭和を抜け上野へ至る上野路、高田地域や新鶴地域から柳津へ抜けて越後街道へ至る赤留峠・銀山峠等の越後路が存在していました。

3－8－4　本町と阿賀川水系

会津において弥生時代から古墳時代にかけては、扇状地形における水耕栽培が始まり、湧水・河川の制御が重要課題として認識されるようになってきます。

農耕社会の初期には、肥沃な扇状地形を中心とした山裾集落が展開されていたものと推測されますが、一方で、複雑な複合扇状地形による河川の氾濫は、利水では済まない治水技術の必要性に迫られました。治水技術が発達するにつれ、中世以降は山裾から平坦地に向かって新田開発が進められていったと考えられます。



阿賀川の流れの変化　（出典：『会津旧事雑考』）

山裾集落において、平坦地を見下ろす位置につくられた山城と、平坦地において通常生活し領地支配するために使用された居館がセットとして存在していることはそのことを如実に表しています。

阿賀川の流路は、天文５（1536）の白髭水といわれる大洪水で大きな変化を見せたと伝えられます。白髭水洪水以前の阿賀川流路は現在の鶴沼川を本流とし、本町の向羽黒山城下を回りこむように流れていましたが、この洪水以降、真っ直ぐに北流する現在の流路に近いものになったとされています。

3－8－5　本町の中世城館と交通

本町の中世城館の立地を地図上で確認すると、そのほとんどが町内の川筋と主要な街道を見下ろす位置に存在することが確認できます。

国史跡に指定されている「向羽黒山城跡」はその代表的な中世山城です。この山城は、麓に阿賀川が流れ、会津盆地を一望できる天然の要害でありながら、会津盆地の南の入り口となる阿賀川の川筋と下野街道を抑えている要衝であったと考えられています。

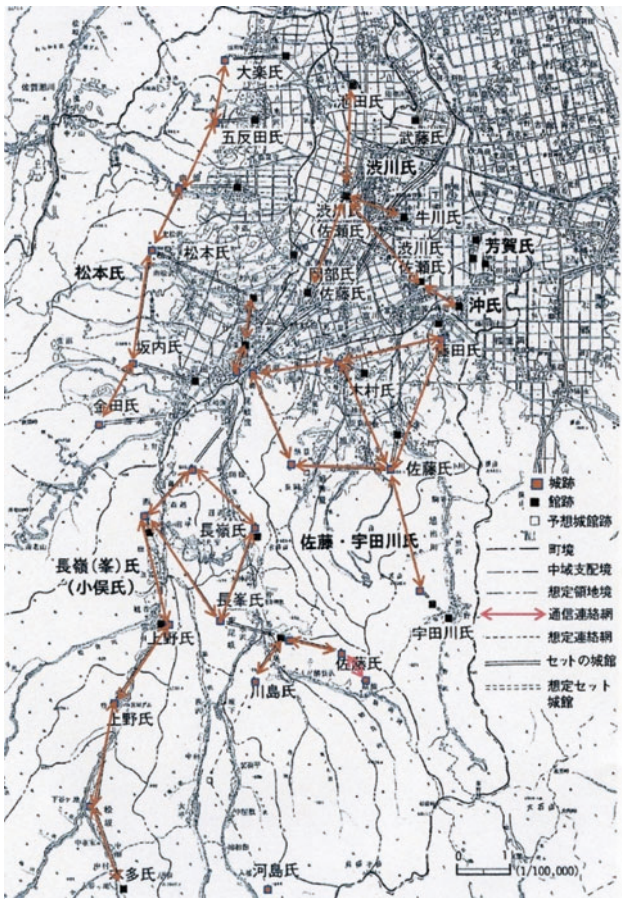
『会津高田町史　第二巻』においては高田地域における中世城館跡とその連絡網が確認されています。これによれば、城郭は基本的に会津盆地を取り囲む稜線上に設置され、有力者の居館が北方からの阿賀川水系を監視するような位置に設定され、南方陸路は下野路へと通じていることが見て取れま

す。

また、城跡の立地からすると、そこから望見できる範囲がそれぞれの豪族の支配範囲であり、江戸時代の会津藩による集落支配とは大いに異なる様相を呈していたことが知られます。

また、この城館と会津三十三観音の札所の位置を重ね合わせると、会津盆地の西南部の山裾集落付近で重複することから、これらの城跡と地元信仰の対象となるべき空間は、互いに関連した領域として捉える必要性があったことと推測されます。

その後、幕藩体制下において保科氏支配時代に大きな集落再編成が行われましたが、中世末期に生まれた共同体意識は、依然として強い絆を保つ要因として意識されてきたと考えられます。



高田地域の城館関係（『会津高田町史　第二巻』に加筆）

宗像神社を中心に描かれた向羽黒山図（出典：『新編会津風土記』）

第３章　会津美里町の歴史文化の特徴と関連文化財群の展開

１　会津美里町における歴史文化の特徴

1－1　歴史から読み取れる特徴

会津盆地全域（会津若松、喜多方・会津坂下・北会津・湯川村を含む旧会津四郡）を概観すると、四方を高い山々に囲まれた山岳信仰の発祥地で、奈良時代からは仏教が入り、さらに平安時代初期以降仏教文化が融合した独特の信仰が培われてきた地域であるといえます。

また、会津盆地は「奥州のまほろば」とも称され、大和政権の影響を受けた最北端の地として、また、徳一による布教で仏教が栄えた地域でもあります。

しかし、現在に至るまでの本町の歴史文化は、前述した古くからの信仰をベースに、古代における中央による地方支配から、中世に台頭する在地勢力による支配、そして戦国時代における蘆名・伊達・蒲生・上杉といった会津領主による支配、豊臣秀吉による奥州仕置、徳川幕府による幕藩体制の成立と宗教統制、明治期における神仏分離等の政治的影響を大きく受けています。

それらを一連の流れとして捉えると、次のようにまとめられます

①古代遺跡にみる河岸段丘上につくられた集落の成立と会津盆地の旧湖沼との関係

②明神ヶ岳山頂の奥宮から手児神社へ、そして伊佐須美神社へと移った民間山岳信仰

③徳一による古代仏教寺院の建立

④河岸段丘稜線上に設けられた中世城跡の分布と防衛機能から見た周辺部との関係

⑤文化伝達経路としての日光街道、沼田街道ならびに越後街道の存在意義

⑥会津盆地山麓部から複合扇状地である会津盆地平坦部への新田開発過程

⑦阿賀川水運の整備と会津四郡と東蒲原郡の関係

⑧『会津風土記』成立期から『新編会津風土記』成立期までの新田開発等による盆地全体の整備過程

⑨座繰り製糸や蚕種の改良等近代における養蚕振興政策　等

これらの概要については第２章における文化財の概要と特徴及び資料編の文化財調査に詳しく示していますが、いずれも本町において集落経営の基本的要素として欠くことのできないものです。

また、普段はあまり意識されていない農村地帯特有の無形民俗文化財も重要で、現在まで集落の行事として、次のようなものが伝承されています。

①集落の長男にのみ伝承される佐布川の早乙女踊りや西勝の彼岸獅子舞

②町内に伝承される複数の甚句

③山裾集落を中心に残る歳の神・庚申講・二百十日のお籠り等の地域信仰との強い結びつきや左下り観音堂のお籠り、旭市川の富士講等

なお、本町は、会津藩による直接支配を受けた地区と幕府直轄地としての御蔵入領が存在する会津地方においては唯一の町ですが、御蔵入領は会津藩預りとしての期間が長く、その管理は基本的に一体のものでした。その両者の石高を合わせたものが、会津藩の実質収入であり、会津藩の経済基盤であったとされます。

1－2　会津美里町の複合型扇状地形から読み取れること

本町の複合型扇状地形を見ると、北下がりの盆地床は西段丘地縁山麓と南山麓からいくつもの沢筋が宮川に向かって流れ込んでおり、その流れはかなりの流速を持つことが理解されます。

そのため、本来的には緩衝地の働きをする遊水池を形成することが難しく、一気に流下してしまい、しばしば崖の崩落と氾濫とを繰り返してきたという経緯があります。そのため、戦国時代までの耕地はその大半を山裾の僅かな平地に求めるしかなかったと推測されますが、江戸時代に新田開発が進められると、このような状況は大いに緩和されたと考えられます。

しかし、保水率の低さや土壌の柔らかさは樹木の生育には適さなかったのか、盆地平坦部には大木がほとんど生育していません。

そのような地勢にあって、古くからの集落はほぼ山裾の扇状地形に立地し、会津三十三観音も主にその集落に立地し、集落の核になっていることが見てとれます。

ただし、高田地区や永井野地区・根岸集落のように古代から本町域の物資集積地として発展した地区等もわずかですが存在し、中世末期に東北有数の山城として整備された向羽黒山城（国指定史跡）の城下町本郷地区等も山裾集落以外に特筆すべき地区と考えられます。

これらの地区における文化財分布を整理すると次のような状況が確認されます。

①高田の成り立ちと伊佐須美神社の鎮座の様子

②向羽黒山城の城下町成立

③本郷焼の定着と会津若松城への遷府

④会津若松城下を支える新田開発

1－3　重層的に現れる会津美里町の原風景

本町の原風景が形成されてきた背景には、1－1、1－2で概観した事象が重層的に現れているもので、各集落に残される数多くの仏像は、集落の存続と深く関わっています。また、町村合併した現在でも『新編会津風土記』に記された多くの集落が存続しているという事実は、その歴史文化的要素が深く根付いていることを示すもので、今後の文化財を活かしたまちづくりにとっての重要な要素として活用されるべきものと考えられます。

特に、外部との交流のあり方は会津盆地の特性を顕著にするもので、高田及び本郷と喜多方、米沢と喜多方、喜多方と新発田、高田及び本郷と柳津、高田及び本郷と下野路及び上野路、会津若松と日光街道は、荷物の搬送経路としてだけではなく、幅広い文化的特質を今に伝える重要な経路であり、さらに中世的特色を残す社会組織の残存形態まで推測させる要素が数多く確認されるに至っています。

2　会津美里町の歴史文化をもとにした関連文化財群の展開

2－1　関連文化財群（関連する文化財の集まり）について

今まで文化財は指定等文化財を主として文化財単体として保存や活用が考えられ、文化財をとりまく社会的な環境や自然環境等、未指定文化財等はともすれば忘れられがちでした。

しかし、指定・未指定にかかわらず文化財は単体で存在しているわけではなく、文化財をとりまく社会環境や自然環境の影響を受けつつ、近隣の文化財と関わりながら、地域の特色として現在まで引き継がれています。

そのため、本町の歴史文化の特色を考えるとき、個々の文化財を結びつけ、関連する文化財の集まり（以下「関連文化財群」という。）として捉えることで、町の歴史文化の特色として集落同士の関連性を見出すことができます。

2－2　関連文化財群の設定と活用の展開の目的

指定・未指定にかかわらず、下記の関連文化財群を設定し、次頁以降に詳細をまとめました。

関連文化財群の設定については、これまで文化財行政や観光行政において、本町の特色として取り上げてきたものの、それを構成する文化財やエリア等が不明瞭だったものを、本事業の調査を通して見直したところ、まさにそれを裏付けるものであったことが判明したため、改めて関連文化財群として再構築を行いました。

そのため、下記関連文化財群の活用展開は、すでに策定されている各種計画等と整合性を持ちながら、町の歴史文化の特色を裏付けること、そして、町の歴史文化の特色を明確にすることで生涯学習の場や学校教育の場での積極的な活用、観光・文化財周知等でのＰＲの拡大等につなげることができます。

表　会津美里町の関連文化財群

No.	関連文化財群	主な集落等
1	仏都会津とまほろばの里	新屋敷・根岸・米沢・雀林・八木沢・赤留・高田周辺
2	伊佐須美神社を中心とした会津文化発祥の地	高田・永井野　周辺
3	向羽黒山城跡周辺に残る中世会津の風景	本郷・大石・大門・相川・三日町を中心として、本町全域
4	会津本郷焼の産地	本郷・柳西
5	街道・連絡路と水運による文化・経済の交流	本町の西南縁
6	幕府領と会津藩領のはざまとして	高田地域
7	生業と深く結びついた民俗文化財	本町全域

2－3　関連文化財群とストーリー

2－3－1　仏都会津とまほろばの里

会津盆地西縁部及び南縁部の山裾の集落は、高田地域・本郷地域の市街地の周辺に存在しながら、物資の供給地として、古くより市街地を支えてきました。

集落には、新屋敷の常福院田子薬師堂を町内最北として、南へ下りながら、雀林の法用寺、八木沢の福泉寺、赤留の不動堂、松岸の手児神社、旭の金跨大明神、大石の左下り観音堂のように、それぞれ集落の中心たりうる社寺が必ず１つは存在しており、住民の信仰を集めています。

これらの社寺は単なる信仰の対象としてだけではなく、祭事や伝統行事を執り行う中で、集落の人々が集まりつながりを確認する場づくりになる等、集落の求心的な役割を担っているのも特徴です。また社寺の所蔵する文化財が町等の指定になることで、地域のことを知る活動が活発となった赤留や大門、螺良岡のような集落も存在します。

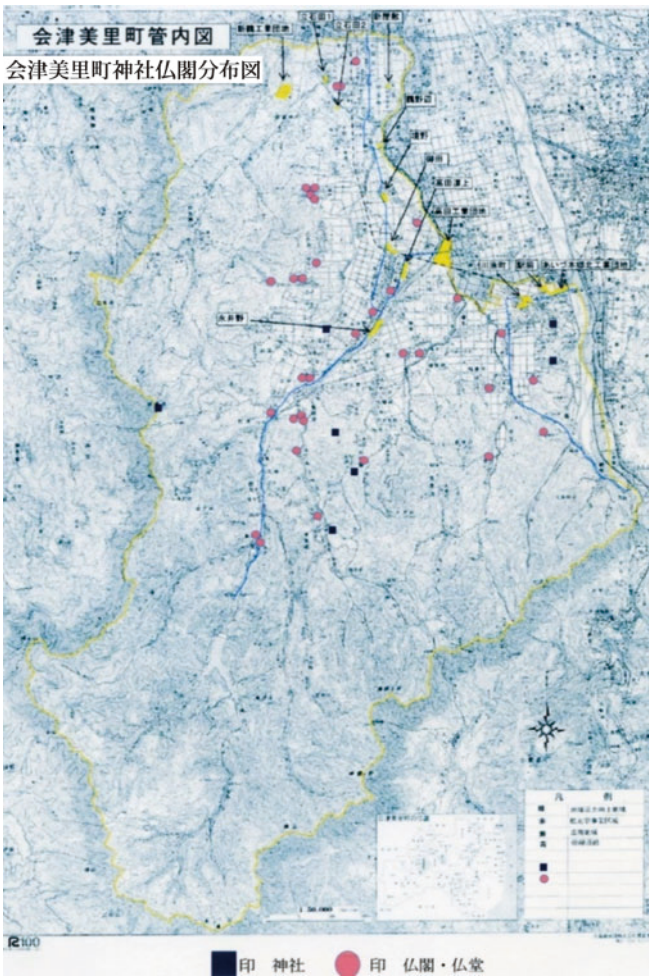


図　会津美里町神社仏閣分布図

また、この一帯は、山に近く、会津盆地の中でも日当たりがよく、赤沢川等河川の近くにありながら、川よりも少し高い丘陵地（河岸段丘）に立地していることから、先史時代より早い時期から人が住み、生活が営まれていた地帯です。

そのためか、本町内に存在する社寺の中でも、由緒ある社寺が多く存在します。常福院田子薬師堂は鎌倉時代の建造物として国重要文化財に、弘安寺の本尊十一面観音像も鎌倉時代の仏像として国重要文化財に指定されており、法用寺には平安時代の木造金剛力士像をはじめ、中世に多くの坊を持った山岳寺院であったことが窺える数多くの文化財が存在します。

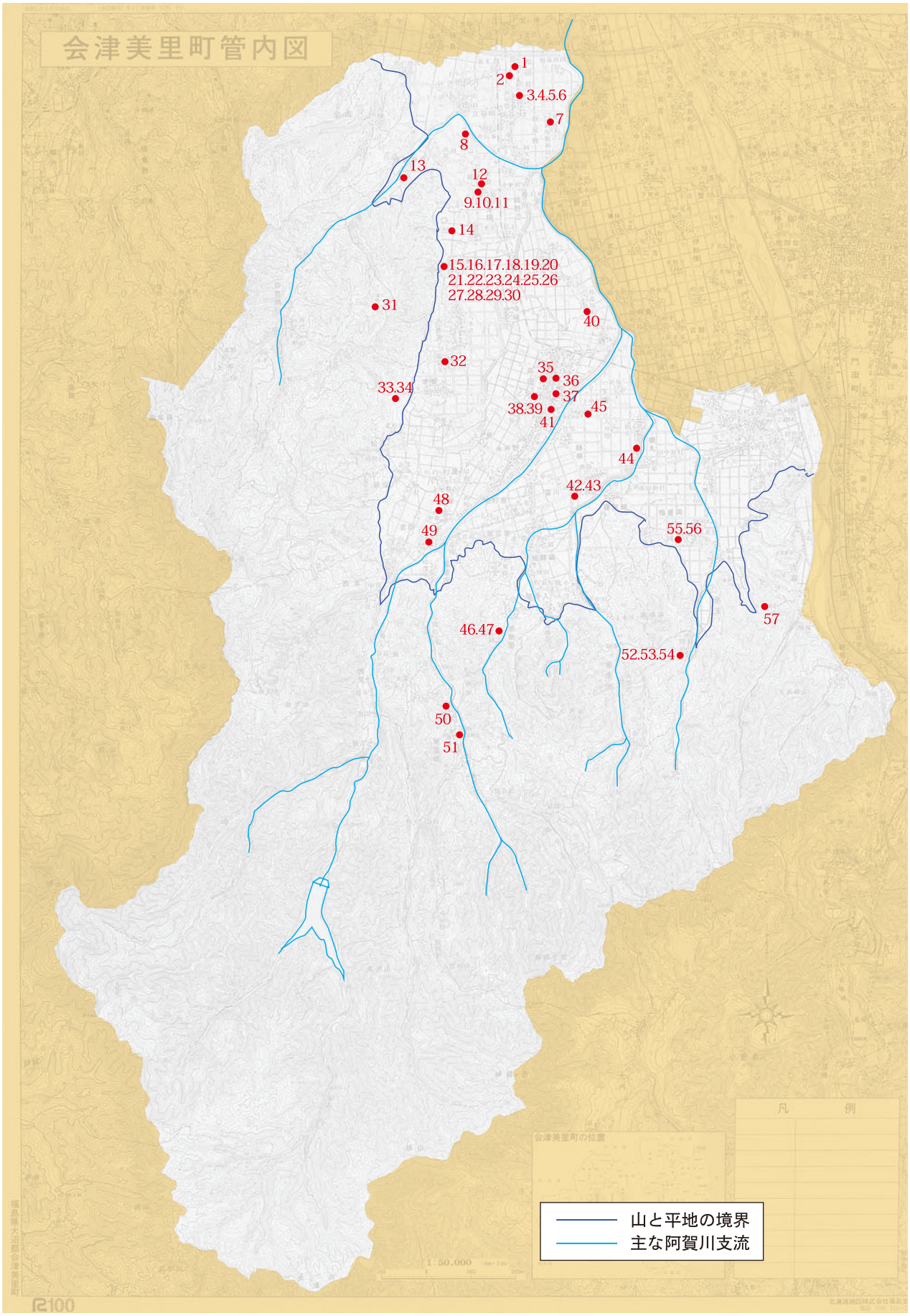
これらの集落の社寺の創建は、古代・中世にさかのぼるもので、社寺の修繕等の維持管理を中心に集落が結びつくという組織のあり方は、近世以降の会津藩による村々の支配以前からのものと考えられます。そして、社寺の維持管理等が、現在でも集落運営の一つとなっていることから、会津の集落形成の名残の「原風景」であると考えられます。

この他にも、１月15日の小正月の頃に行われる「歳の神」や「百万遍」、「大般若」等もこれらの集落を中心に引き継がれており、特有の民俗文化を色濃く残します。

関連文化財群

番号	構成文化財	所在場所等	番号	構成文化財	所在場所等
1	宝篋印塔	多勢寺	29	御氷餅搗跡	法用寺
2	沢田・稲荷神社のケヤキ	沢　田	30	子守唄「ほらほらねろねろ」	雀　林
3	常福院薬師堂	常福院	31	蓋沼の浮島	雀　林
4	木造薬師如来坐像・脇侍日光菩薩・月光菩薩像	常福院	32	木造薬師如来坐像	福泉寺
			33	大宝院不動堂附棟札	赤　留
5	田子薬師堂木造十二神将像	常福院	34	神明神社	赤　留
6	常福院田子薬師堂花祭り	常福院	35	一字蓮台法華経開結共（九巻）	龍興寺
7	新屋敷新田のイチョウ	新屋敷	36	木造吉祥天立像	高　田
8	立行事稲荷神社の大杉	立行事稲荷神社	37	銅造阿弥陀如来及両脇侍立像	法幢寺
9	弘安寺旧観音堂厨子	弘安寺	38	木造阿弥陀如来及び両脇侍立像	長光寺
10	銅造十一面観音菩薩像・脇侍 不動明王・地蔵菩薩立像	弘安寺	39	木造六地蔵立像	長光寺
			40	木造十一面観音立像	観音寺
11	中田観音堂のサクラ	弘安寺	41	智鏡塚	清龍寺
12	根岸のウコン桜	根　岸	42	福生寺観音堂	福生寺
13	木造大日如来坐像	興隆寺	43	木造十一面観音菩薩坐像	福生寺
14	米沢の千歳ザクラ	米　沢	44	熊野神社（橋爪）のスギ	橋　爪
15	法用寺本堂内厨子及び仏壇	法用寺	45	木造地蔵菩薩立像	延命寺
16	法用寺三重塔（附板絵図）	法用寺	46	木造阿弥陀如来立像	長福寺
17	法用寺観音堂	法用寺	47	木造地蔵菩薩坐像	長福寺
18	木造金剛力士立像	法用寺	48	手児神社　本殿・拝殿	手児神社
19	木造十一面観音立像（桂）	法用寺	49	船岡稲荷神社のスギ	仁　王
20	木造十一面観音立像（欅）	法用寺	50	大神沢薬師堂	大神沢
21	伝・木造得道上人坐像	法用寺	51	朝立神社	宮
22	法用寺礼盤	法用寺	52	関山の水神社	関　山
23	鰐口	法用寺	53	関山観音堂	関　山
24	「昼夜不退番」板	法用寺	54	関山熊野神社	関　山
25	銅板製釣灯篭	法用寺	55	木造薬師如来坐像	鳳来寺
26	へびの御年始	法用寺	56	鳳来寺薬師堂	鳳来寺
27	虎の尾桜	法用寺	57	左下り観音堂	大　門
28	法用寺の大イチョウ	法用寺			

その他　このエリアの周辺集落において、「歳の神」（１月15日前後）や「百万遍」（２月頃）、「大般若」（３～４月頃）等が実施されています。


会津美里町管内図
1
2
3.4.5.6
7
8
13
12
9.10.11
14
15.16.17.18.19.20
21.22.23.24.25.26
27.28.29.30
31
40
32
35
36
37
33.34
38.39
41
45
44
42.43
48
49
55.56
57
46.47
52.53.54
50
51
凡　例
会津美里町の位置
1:50,000
山と平地の境界
主な阿賀川支流

関連文化財の位置

2－3－2　伊佐須美神社を中心とした会津文化発祥の地

伊佐須美神社は、『古事記』に掲載されている四道将軍伝説とともに語られる、会津の総鎮守です。高田地域の信仰の中心であるだけでなく、歴代会津領主の信仰も集める等、その影響力は大きいものでした。

伊佐須美神社

会津盆地の物流の中心的町を形成してきた高田地区は、全体として北下がりで、雀林集落から僅かに東下がりの複合扇状地形に立地し、会津若松城下の高田村として商業地を形成しており、南に続く永井野地区と共に発展した所です。高田組上７か村として竹原村・西勝村・富岡村・上中川村・境新田村・屋敷村を含めた穀倉地帯の中心で、『新編会津風土記』が「此地近村ヨリ地勢稍高キ故名クト云」と伝えるように、西山裾の赤沢川と東の宮川に挟まれ、わずかに高くなっています。

水利的には「胄組松岸村ノ方ヨリ来リ、数派トナリ田地ニ漑ク」（『新編会津風土記』）と記し、そこから流出した堆積土は中世・近世期の新田開発に伴い、豊かな農地となっただけでなく、涵養池として水害の対策にも寄与してきたものと推測されます。

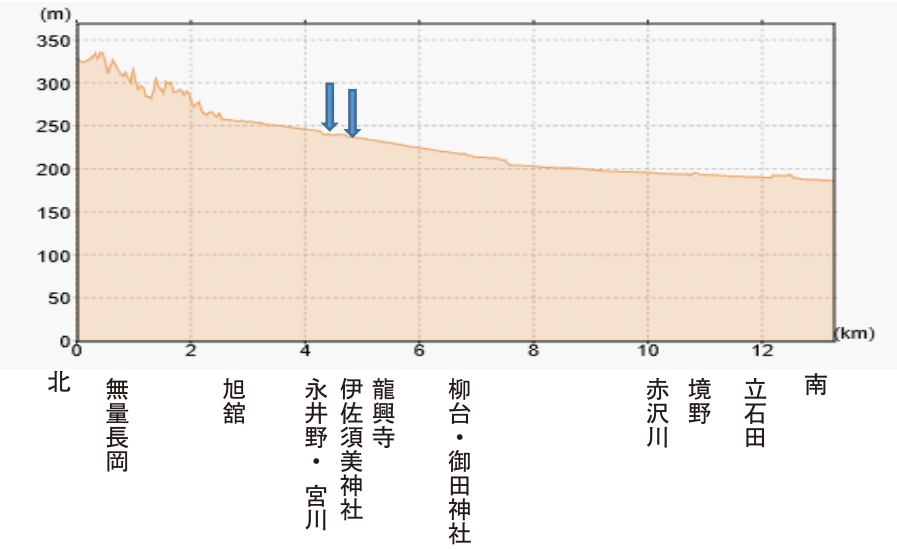


図　伊佐須美神社周辺の高低差

しかし、このような地勢であっても宮川はたびたび氾濫を起こし、人々は殺生石稲荷を祀り、鎮魂を祈願しました。

さらに明神ヶ岳に奥宮を置く伊佐須美神社が、元々修験の信仰形態を基礎としていたことは「山駆け」に先立つ身を清めるための「お籠堂」である梁間五間桁行十間の「長床」を具備していたこと（『寛文五年　大沼郡高田組郷村万改帳』）からも明らかです。博士山や明神ヶ岳のような自然に畏怖の念を抱く地元信仰を背景に、伊佐須美神社を中心として山々に守られた地としての信仰形態を発展させたと考えられます。

また、稲作の伝播と関係が深いと推測される「伊佐須美神社の田植神事（御田植祭）」は、喜多方市の「慶徳稲荷神社の田植神事」とともに、「会津の御田植祭」として、日本の御田植祭の北限とされる、大変貴重な無形民俗文化財です。平成27年（2015）に国の選択文化財となって以降、行政はもとより地域住民の本祭に対する意識は高くなり、本町の小中学校全校による祭事参加等、選択以前よ

りも祭りへの参加が積極的になりました。

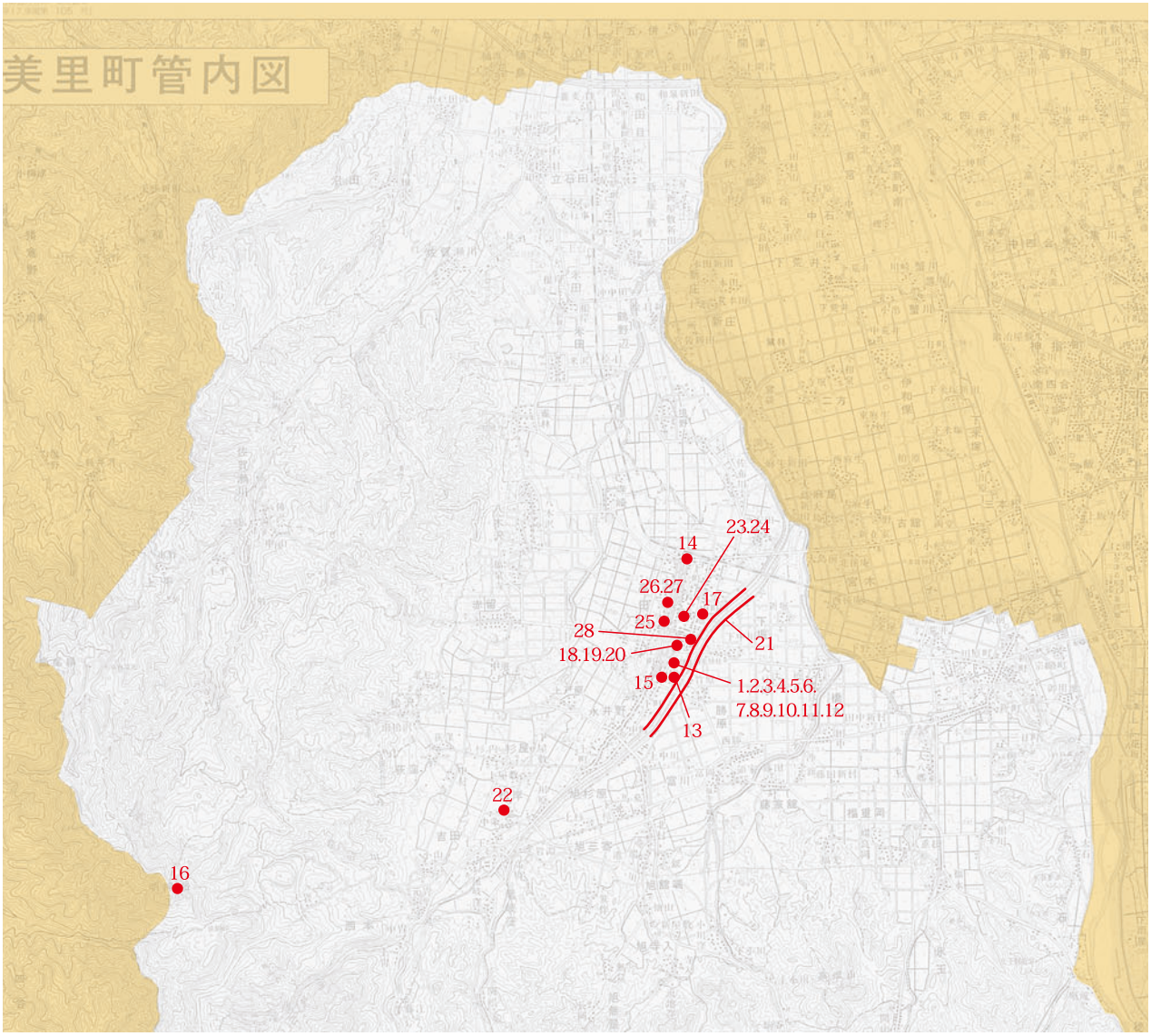
さらに、清龍寺が近世においては伊佐須美神社の奥の院であったこと、同じく清龍寺に所在する智鏡塚と関係の深い智鏡上人は、法幢寺第3世の住持でありながら、清龍寺の鐘銘文や、手児神社神額に名が出てくる僧で、伊佐須美神社の社僧であった可能性も指摘されています。

このほか、諸説あるものの出自が本町とされている天海大僧正に関する史跡も伊佐須美神社をはじめ高田地区に所在しています。このように、高田地区に存在する寺院は、伊佐須美神社と何らかの関係があったと考えられます。

このように、伊佐須美神社を中心とした高田地区及び永井野地区周辺の歴史文化は、会津盆地の西南縁に形成された「仏都会津とまほろばの里」と対をなして、山奥の自然に畏怖の念を抱く地元信仰を背景に、中央による奥州支配の影響を受け、さらに仏教文化が融合し共存していた会津文化発祥の地とも言える地域です。

関連文化財群

番号	構成文化財	所在場所等	番号	構成文化財	所在場所等
1	朱漆金銅装神輿	伊佐須美神社	15	高田の盆踊り（高田甚句）	高　田
2	木造狛犬（一対）	伊佐須美神社	16	伊佐須美神社奥宮の地	明神ヶ岳
3	伊佐須美神社の田植神事（御田植祭）	伊佐須美神社	17	古御田神社の地	高　田
4	黄金扉	伊佐須美神社	18	「芭蕉翁袖塚」碑	清龍寺
5	古代扉	伊佐須美神社	19	智鏡塚	清龍寺
6	銅板製釣灯篭	伊佐須美神社	20	清龍寺の種蒔ザクラ	清龍寺
7	鉄華表（一対）	伊佐須美神社	21	宮川千本桜	高　田
8	薄墨桜	伊佐須美神社	22	手児神社	松　岸
9	伊佐須美神社社叢	伊佐須美神社	23	銅造阿弥陀如来及両脇侍立像	法幢寺
10	伊佐須美神社の南光のヒノキ	伊佐須美神社	24	法幢寺のケヤキ	法幢寺
11	伊佐須美神社の紫竜のフジ	伊佐須美神社	25	慈眼大師誕生地	高　田
12	太々神楽	伊佐須美神社	26	天海僧正両親の墓	龍興寺
13	殺生石稲荷	伊佐須美神社	27	浮身観音堂	龍興寺
14	御田神社	高　田	28	田中文書四種	個人蔵


美里町管内図
23.24
14
26.27
17
25
28
21
18.19.20
15
1.2.3.4.5.6.
7.8.9.10.11.12
13
22
16

関連文化財の位置

2－3－3　向羽黒山城跡周辺に残る中世会津の風景

会津の戦国領主蘆名盛氏によって築城された向羽黒山城は、東北最大級の山城です。かつては盛氏の隠居城と言われていましたが、その規模や遺構の様子から、今では蘆名氏の本拠である黒川城（現在の会津若松城）と対をなす、重要な山城と位置付けられています。向羽黒山城跡は平成13年に国の史跡に指定され、町では山城の調査・整備事業を継続して行っています。

さらに、平成29年（2017）４月６日には、公益財団法人日本城郭協会より「続日本100名城」のひとつに選定されました。ガイドブックによれば、その見どころは「山城独自の地形がよく残っており、堀や平場等、城を構成する遺構のスケールの大きさを実感できる」としています。

この山城の麓には城下町が形成されていたと言われ、現在でも三日町や高田町等、当時の城下町の名残と言われる地名が残ります。羽黒山の西南麓近くには「船場」という地名が残り、当時の鶴沼川※が向羽黒山城の東側を取り囲むように内陸側に入り込んでいたことによるものと考えられます。

向羽黒山城跡縄張図（出典：「向羽黒山城跡Ⅴ」）

また、町ハザードマップによれば、この周辺は浸水想定区域であることから古くより自然の要害であったことが容易に想像できます。そのため、過去の歴史を拾いながらの景観整備・防災整備が必要となる地域と考えられています。

左下り山から大日影山・船場・岩崎山（向羽黒山城一曲輪）・本郷を結ぶ地形を断面図から見ると、本郷は船場の標高よりわずかに低地に当たり、船場で水面が上昇すると氾濫の危険にさらされることが理解できます。

相川観音堂

一方、山城跡には、「お茶屋場」と呼ばれる、盛氏が茶を嗜んだことにちなんだ曲輪名や、近隣の集落に盛氏が授けたという伝説の残る絵画が残る等、蘆名家とゆかりのあるものが多く存在します。

この他、中世に改修されたといわれる左下り観音堂や三日町の太子堂、元は向羽黒山の南山麓にあったと推測される相川観音堂等中世の信仰の名残を確認することができます。

※　p67参照

さらに、本町には防衛拠点となった中世の城館跡が多数存在します。代表的な山城は本郷地域の向羽黒山城跡ですが、高田地域を中心に平地に館がそれと対をなす形で集落の背後にある山の中腹や頂上に山城がつくられました。特に、それらは街道や川筋に沿ってつくられており、外から入ってくる敵等の防御拠点とされていたと考えられています。

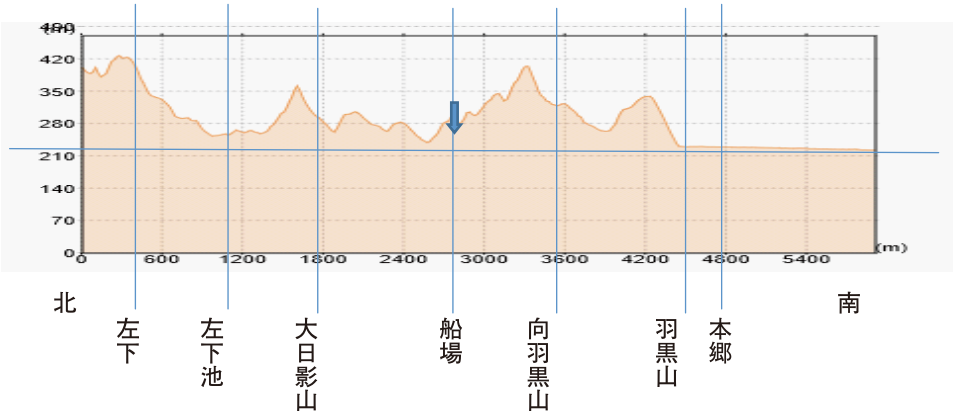


図　本郷地域周辺の高低差

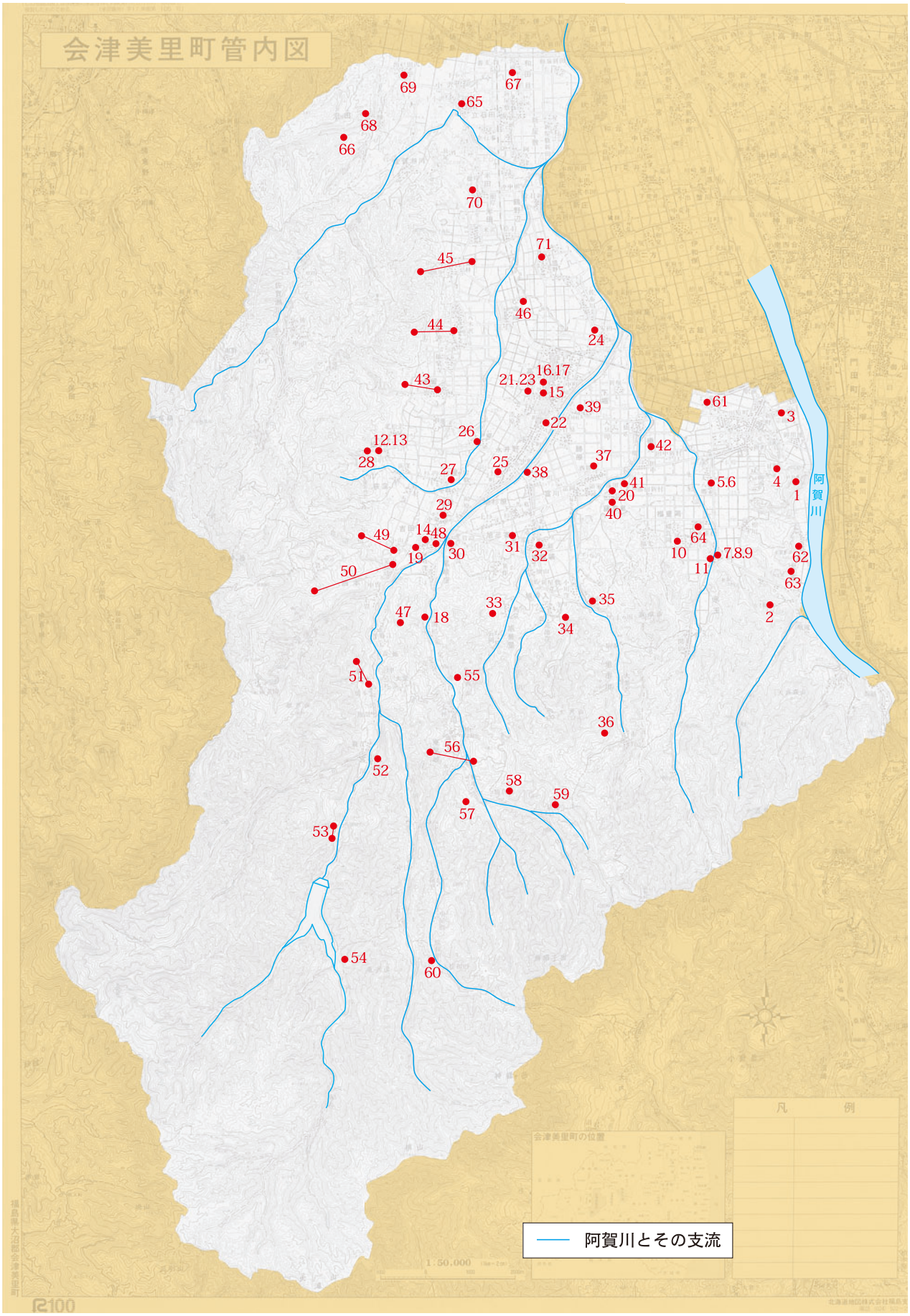
城郭は基本的に会津盆地を取り囲む稜線上に立地し、有力者の居館が北方からの阿賀川支流を監視するような位置に設定され、南方の陸路は下野路へと通じていることが確認されます。

また、城跡の立地からすると、そこから望見できる範囲がそれぞれの領主の支配範囲であり、江戸時代の幕藩体制とは異なる様相を呈していたことが窺えます。これらの城跡と寺社を核とした集落の範囲は、互いに関連した領域として捉える必要性があったことと推測されます。近世の幕藩体制下において、古来の荘園管理と中世城館との関係が薄れるという社会体制の変化が起こりましたが、中世末期に生まれた共同体意識は、依然として強い絆を保つものとして意識されていたと考えられます。

この他にも、本町の中世を窺える文化財として、蘆名氏が伊佐須美神社に寄進したとされる国指定重要文化財「朱漆金銅装神輿」や蘆名氏以降会津に入部した伊達政宗に関係する文書類、戦国時代末期から江戸時代初期に活躍した「天海大僧正」に関係する史跡等が残り、会津地方の中世を語る上で貴重な資料が残る地域といえます。

関連文化財群

番号	構成文化財	所在場所等	番号	構成文化財	所在場所等
1	向羽黒山城跡	本　郷	37	西勝城跡	西　勝
2	左下り観音堂	大　石	38	上中川館跡	上中川
3	宗頤町の由来	本　郷	39	中川城跡	中　川
4	木造聖徳太子立像	三日町	40	藤田城跡	藤　田
5	絵画掛軸鷹絵	大八郷	41	沖ノ舘館跡	沖ノ舘
6	鳳凰地蔵尊（地蔵一尊浮彫板碑）	大八郷	42	橋爪館跡	橋　爪
7	阿弥陀三尊種子板碑	藤巻神社	43	赤留城跡・赤留館跡	赤　留
8	阿弥陀一尊種子板碑	藤巻神社	44	八木沢城跡・八木沢館跡	八木沢
9	藤巻神社の乳イチョウ	藤巻神社	45	雀林城跡・雀林館跡	雀　林
10	木造薬師如来坐像	鳳来寺	46	寺崎館跡	寺　崎
11	木造毘沙門天立像	積翠寺	47	尾岐窪城跡	尾岐窪
12	松本図書父子肖像掛軸	松　沢	48	仁王城跡	仁　王
13	伊達政宗寄進状	松　沢	49	小山城跡・小山館跡	小　山
14	仁王寺文書	仁王寺	50	冑城跡・冑館跡	冑
15	慈眼大師誕生地	高　田	51	下舘城跡・下舘館跡	下　舘
16	天海僧正両親の墓	龍興寺	52	落合城跡・落合館跡	落　合
17	絹本著色両界曼荼羅（二幅）	龍興寺	53	牧内城跡・牧内館跡	牧　内
18	新国上総介頼基夫妻五輪塔	東尾岐	54	入谷ヶ地城跡	入谷ヶ地
19	弘安十年銘石標	仁　王	55	遅沢城跡・遅沢館跡	遅　沢
20	大光寺供養塔（板碑）	藤　田	56	水沢館跡・水沢城跡	水　沢
21	雷神社のエノキ	高　田	57	戦場城跡	戦　場
22	朱漆金銅装神輿	伊佐須美神社	58	勝負沢城跡	勝負沢
23	高田館（城）跡	高　田	59	結能城跡	結　能
24	安田館跡	安　田	60	入桧和田城跡	入桧和田
25	白井館跡	永井野	61	荒井萬五郎館跡	荒　井
26	上戸原館跡	上戸原	62	大石館跡	大　石
27	杉屋城跡	杉　屋	63	相川館跡	相　川
28	松沢城跡	松　沢	64	館山館跡	八重松
29	松岸館跡	松　岸	65	梁田館跡	梁　田
30	赤館跡	旭三寄	66	舘ヶ曽根山城跡	舘ヶ曽根
31	池ノ端館跡	旭池ノ端	67	沢田館跡・物見壇館跡	沢　田
32	長岡館	旭舘端	68	入田沢館跡	入田沢
33	無量城跡	旭無量	69	出戸田沢館跡	出戸田沢
34	寺入城跡	旭寺入	70	中田館跡	根　岸
35	小川館跡	旭小川	71	境野館跡	境　野
36	市野城跡	旭市野			



関連文化財の位置

2－3－4　会津本郷焼の産地

陶土山（大久保山）

向羽黒山城跡の麓に形成されている本郷地域の市街地本郷地区は、13の会津本郷焼窯元（会津本郷焼事業協同組合加入窯元）が存在する会津本郷焼の産地です。会津本郷焼は、江戸時代、特産品として『新編会津風土記』に「陶器」と記載されています。『新編会津風土記』編纂以降には磁器の製造も始まり、現在も陶磁器の産地として名をはせています。

その歴史は、蒲生氏郷による会津若松城の瓦製造から始まったとされており、会津若松城の赤瓦や磁器の開発等、会津藩における陶磁器製造の歴史を見る上で重要な産地です。

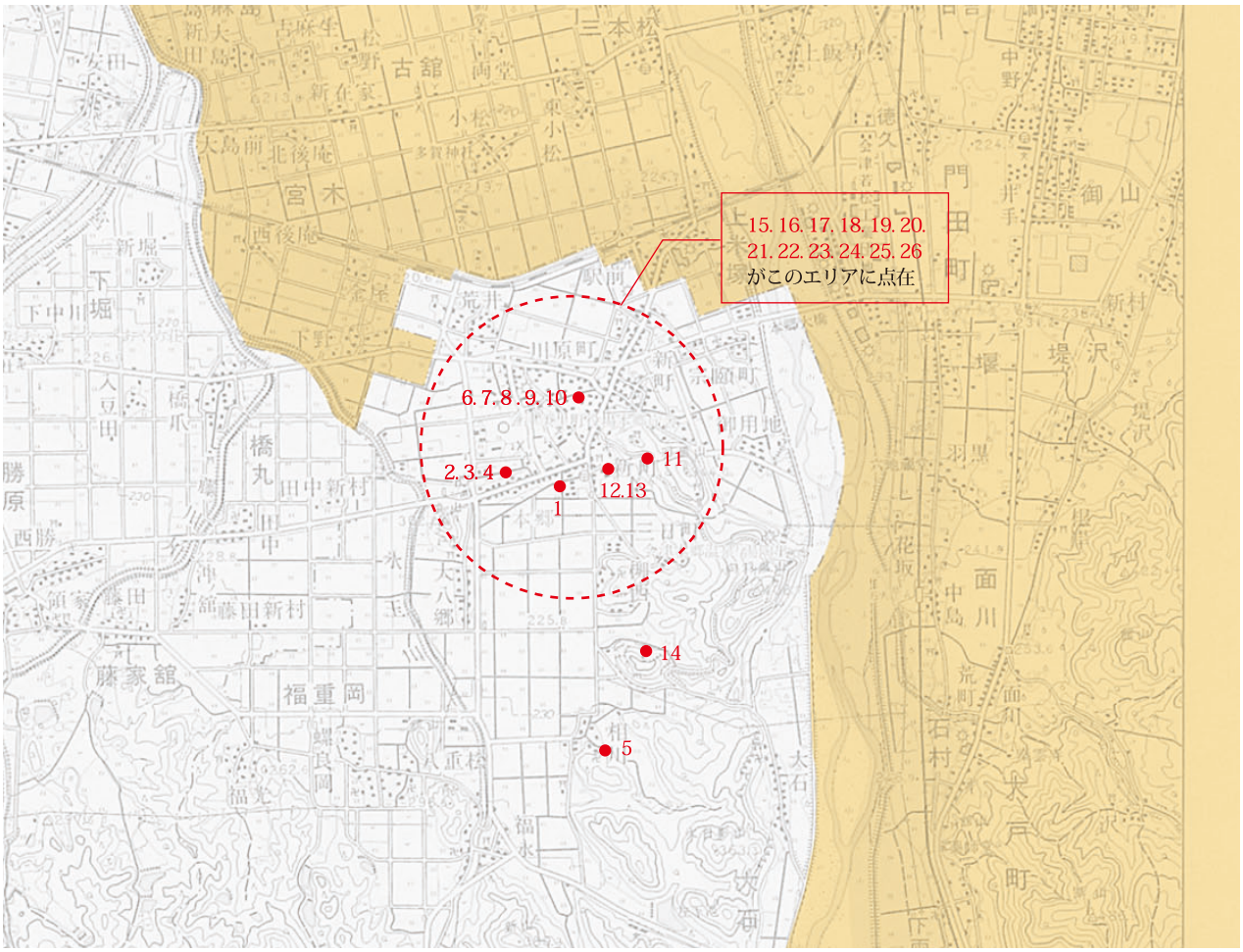
また、向羽黒山城跡の一部である観音山の陶土が焼物に適していたため産地として栄えました。現在は、向羽黒山城跡の近隣のある大久保山から陶石を採取しています。現在、当地の土を使う窯元も減少しつつありますが、削られた山肌を見せる陶土山（大久保山）の景観も、本郷地区ならではのものです。

窯元に残る煙突（流紋焼）

本郷地区では陶磁器の原料である陶石を砕くためと、大正時代に起こった大火の教訓から、火災への備えとして地区内に水路が張り巡らされているのが特徴で、地場産業が景観をつくっている地区でもあります。水路には、陶磁器片である「じゃらんかけ」がみられるのも産地特有の光景です。また、本郷地区の常勝寺には、陶祖水野源左衛門と磁祖佐藤伊兵衛を祀った陶祖廟があり、毎年９月16日には陶祖祭（とうそさい）を執り行い、先人の遺徳を偲んでいます。

関連文化財群

番号	構成文化財	所在場所等	番号	構成文化財	所在場所等
1	銅造大聖歓喜天立像	本　郷	14	陶土山（大久保山）	柳　西
2	木造馬頭観音像	圓通寺	15	閑山窯	本　郷
3	木造阿弥陀如来坐像	圓通寺	16	樹ノ音工房	本　郷
4	染付圓通寺銘釘隠	圓通寺	17	酔月窯	本　郷
5	木造十一面観音立像	相　川	18	陶房　彩里	本　郷
6	抹茶碗	本　郷	19	宗像窯	本　郷
7	染付松竹梅図仙盞瓶	本　郷	20	流紋焼	本　郷
8	鬼瓦	本　郷	21	かやの窯	本　郷
9	陶家先祖覚書	本　郷	22	草春窯	本　郷
10	瀬戸市	本　郷	23	力窯	本　郷
11	登窯	本　郷	24	陶雅　陶楽	本　郷
12	陶祖廟	常勝寺	25	富三窯	本　郷
13	陶祖祭	常勝寺	26	鳳山窯	本　郷

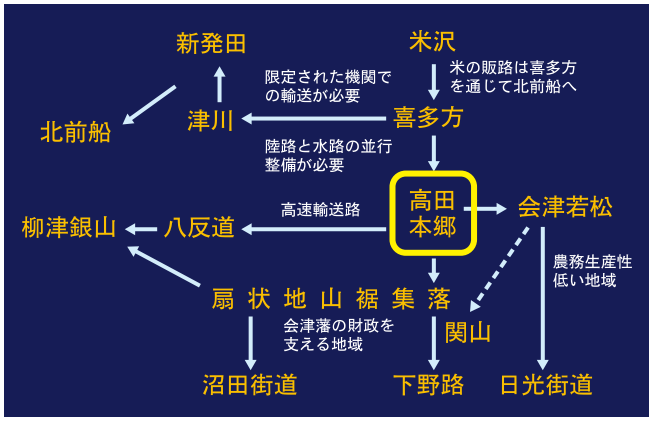


関連文化財の位置

2－3－5　街道・連絡路と水運による文化・経済の交流

本町には３本の街道・連絡路が存在していました。１本は若松城下から本郷・大八郷・関山を抜け、氷玉峠を越えて大内宿へ向かう下野街道、２本目は、現在の国道401号線とほぼ重なり、高田から尾岐を通り博士峠を越えて昭和へ抜け、最終的には群馬県沼田へ向かう上野路、３本目は新鶴地域から柳津へ抜け、最終的には越後街道へ結びつく越後路です。

また、本町にはこれらの街道・連絡路を結ぶ道や、宿駅がつくられたことで発展した集落が確認できます。



高田・本郷を中心として成立した交易網

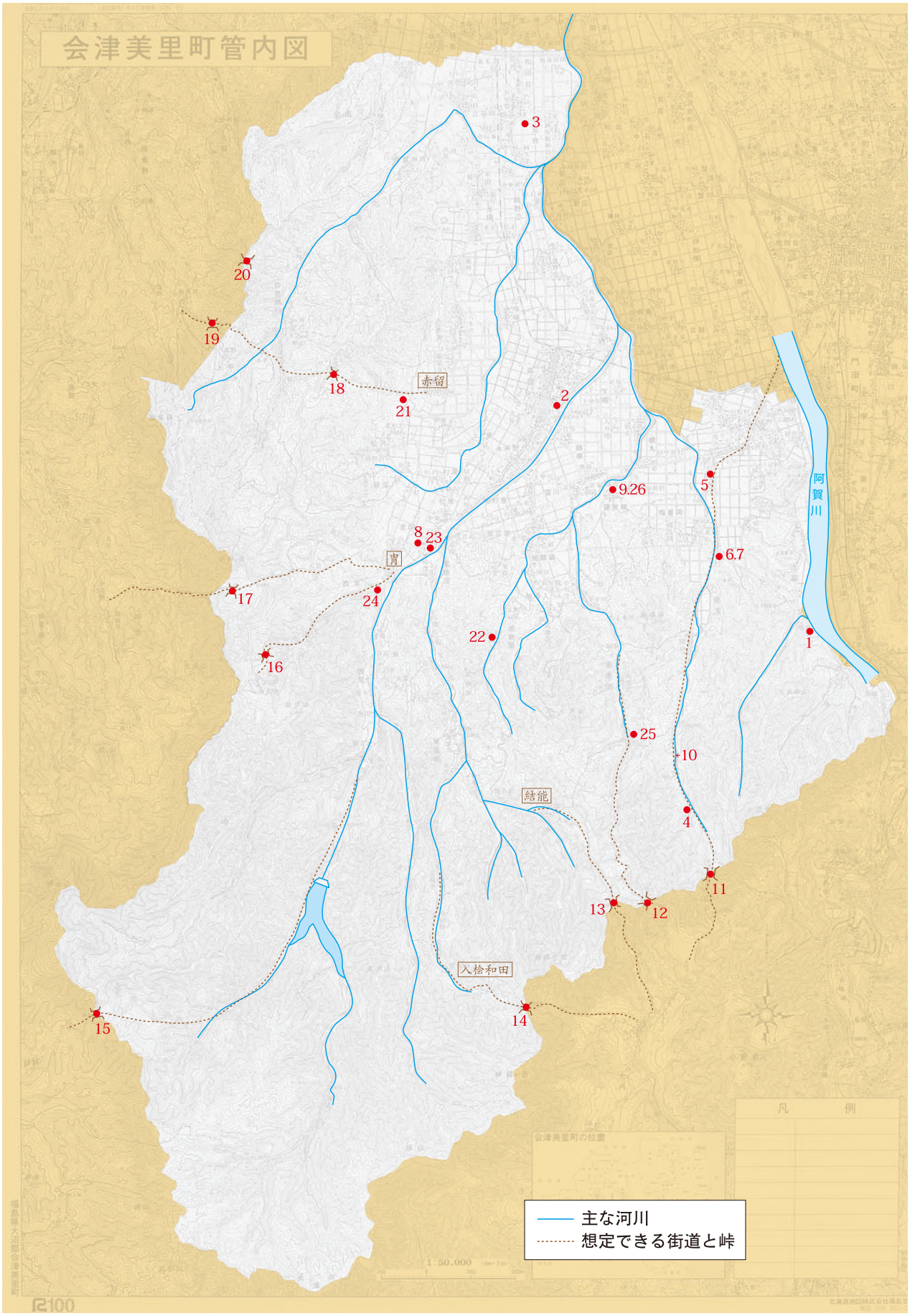
３本の街道・連絡路は、盆地の外からの文化が流入する経路でもあります。そのため、上野大工・下野大工・越後大工の手による建造物が町内には散見し、その分布はおおよそそれぞれの街道筋に確認することができます。また、鎌倉時代に京都で作成された仏像が本町に存在すること、福島県中通りから南会津を通り伝播した「太々神楽」のような無形民俗文化財が確認されること等からも、文化的にもこれらの街道が本町にもたらした影響は大きいものです。

また、阿賀川の水運は新潟―津川―会津をつなぐ重要な交通手段であり、それはさらに阿賀川支流を持つ本町においても大きな役割を果たしていました。

前述した中世の城館は、主に川筋・街道筋を監視するかのような立地に築かれており、本町における中世の戦略的構想が確認できることから、外部と内部の交差地点である街道や水運は重要視されていたことが見て取れます（中世城館については2－3－3参照）。

関連文化財群

番号	構成文化財	所在場所等	番号	構成文化財	所在場所等
1	肝煎の家に伝わる門	穂　馬	14	桧和田峠	－
2	田中文書四種	高　田	15	博士峠	－
3	新屋敷一里塚跡	新屋敷	16	海老山峠	－
4	栃沢の一里塚	栃　沢	17	狭間峠	－
5	鳳凰地蔵尊（地蔵一尊浮彫板碑）	大八郷	18	赤留峠	－
6	阿弥陀三尊種子板碑	藤巻神社	19	市野峠	－
7	阿弥陀一尊種子板碑	藤巻神社	20	松坂峠	－
8	弘安十年銘石標	仁　王	21	大宝院不動堂附棟札	赤　留
9	大光寺供養塔	大光寺	22	長福寺子安観音堂	旭無量
10	下野街道	本郷地域	23	仁王寺薬師堂	仁王寺
11	氷玉峠	－	24	胄観音堂	西　本
12	市野峠	－	25	市野宿	旭市野
13	結能峠	－	26	藤田宿	藤　田


会津美里町管内図
3
20
19
18
21
赤留
2
9.26
5
阿賀川
8
23
宵
6.7
17
24
22
1
16
25
10
結能
4
11
13
12
入桧和田
14
15
主な河川
想定できる街道と峠

関連文化財の位置

2－3－6　幕府領と会津藩領のはざまとして

会津美里町は、江戸時代の幕府直轄地と会津藩領が同一地域に存在する会津内では唯一の町です。現在の町域は幕府領であった東尾岐組と永井野組・冑組、会津藩領であった橋爪組・南青木組・高田組・中荒井組にまたがっていました（P.9参照）。

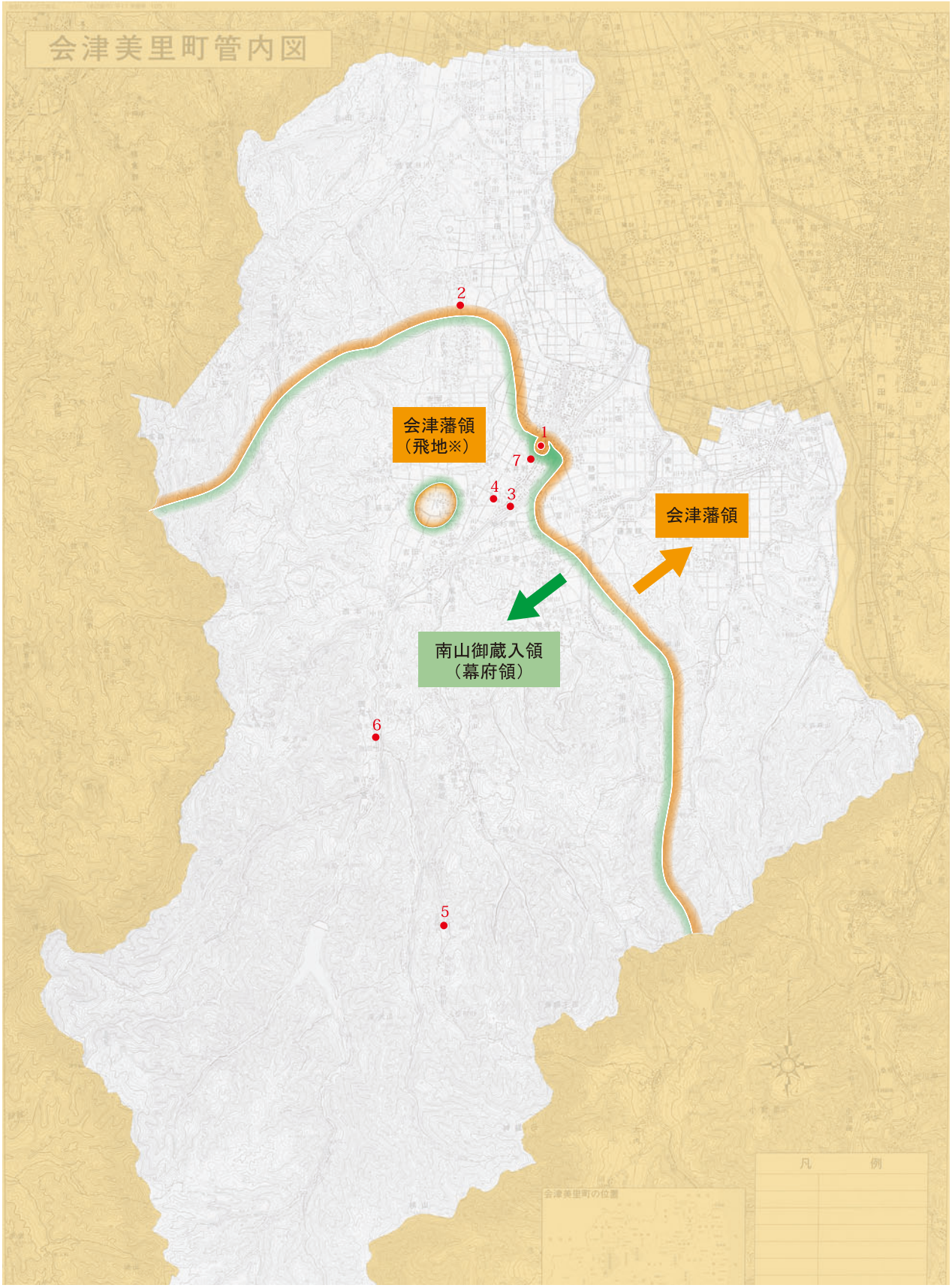
そのため江戸時代には、近接地でありながら、その商業のあり方や町民の組織等も少しずつ異なっていました。その意識の違いは、隣接しながらもお互いに意識しあう高田地区と永井野地区の関係にも垣間見ることができます。しかしながら、町村合併の影響もあり、現在はその意識も薄くなりつつあるのが現状です。

会津地方においてかつての幕府領と会津藩領が同じ町域にあるのは、本町のみの特色であり、言い伝え等ではその違いをよく耳にしますが、史料や文化財等として確認されているものが少ないため、今後の詳細な現地調査が必要です。

御蔵入領と会津藩領の境を示す石標

関連文化財群

番号	構成文化財	所在場所等	番号	構成文化財	所在場所等
1	相田のケヤキ	高　田	5	御蔵入三十三観音8番札所	大　平
2	御蔵入と幕領の境を示す石標	八木沢	6	御蔵入三十三観音8番札所	観　音
3	永井野金比羅神社	永井野	7	御蔵入三十三観音9番札所	永井野
4	永井野熊野神社	永井野	※御蔵入三十三観音8番札所については、諸説あります。		



関連文化財の位置

※親村と地続きでなく、他の村内に入り込んだ土地のこと。ここでは、幕府領に会津藩領が入っていること。

2－3－7　生業と深く結びついた民俗文化財

伊佐須美神社の田植神事を始め、町内には数多くの無形民俗文化財が伝承されています。そのほとんどは稲作と関係したもので、会津美里町が稲作を中心とした農業が盛んであったことが伺えます。中には、「佐布川の早乙女踊り」や「西勝の彼岸獅子舞」のように、集落の長男のみに伝承されるものもあり、集落特有の文化が外へ流出しないよう工夫していた地域の思いを垣間見ることができます。また同一地域に複数の甚句が残るといった、他の町村にはみられない特徴もあります。

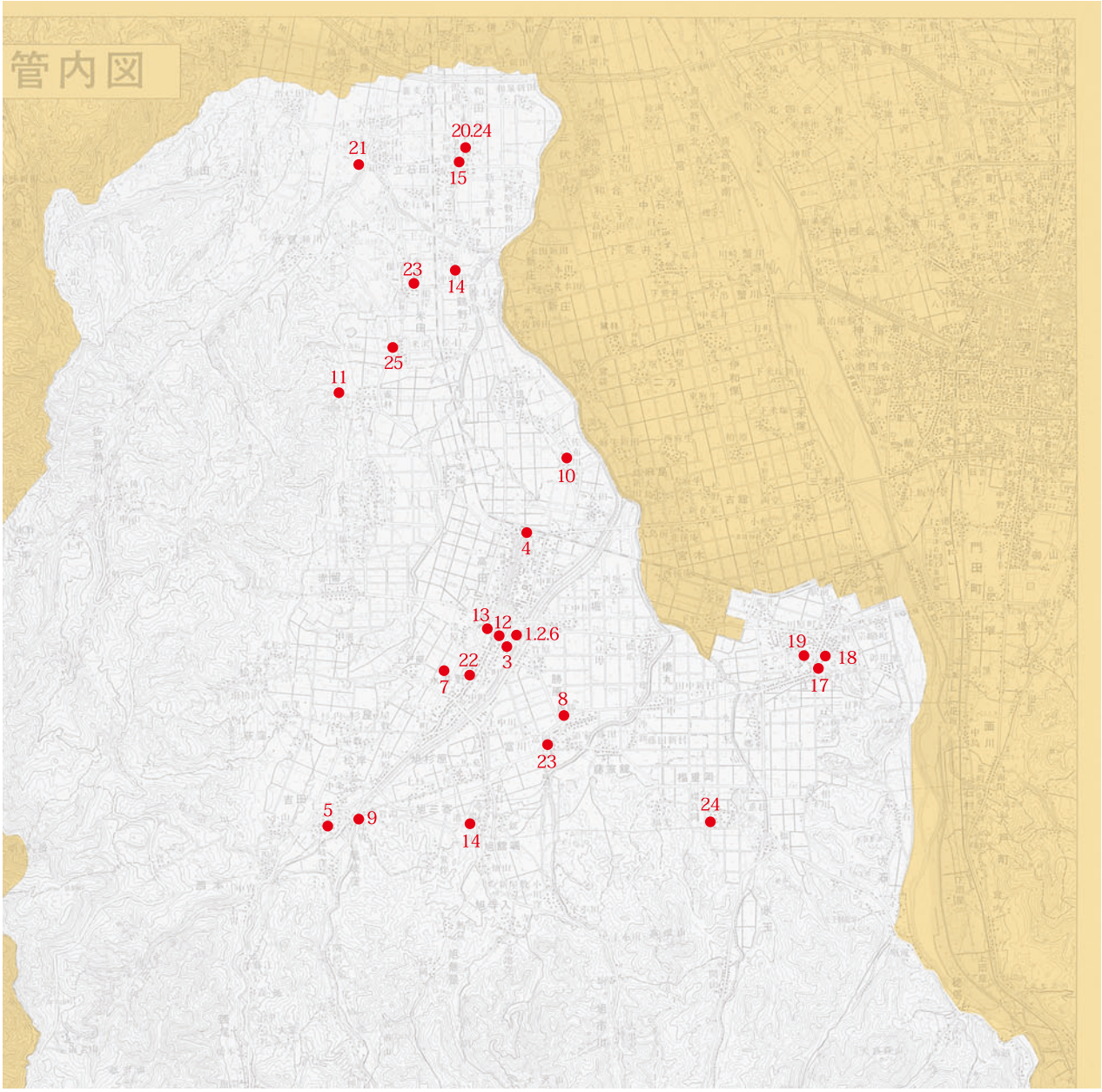
特に旧幕府領の山裾集落は、地域と信仰の結びつきが強く、現在でも歳の神、庚申講、二百十日のお籠り等が、小規模ながら続いています。

田子薬師堂の花祭り

陶祖祭

関連文化財群

番号	構成文化財	所在場所等	番号	構成文化財	所在場所等
1	伊佐須美神社の田植神事	伊佐須美神社	15	香村の絵馬	常福院
2	太々神楽	伊佐須美神社	16	天明飢饉之図	－
3	高田の盆踊り（高田甚句）	高　田	17	広瀬神社例大祭	広瀬神社
4	高田（北若）の豊年踊り	高　田	18	陶祖祭	常勝寺
5	尾岐の盆踊り	尾　岐	19	本郷の盆踊り（本郷甚句）	本　郷
6	高田の祭り囃子	高　田	20	常福院田子薬師堂花祭り	新屋敷
7	絵馬「農稼十二ヶ月之図」	熊野神社	21	立行事稲荷神社の金鈴	立行事
8	西勝の彼岸獅子舞	西　勝	22	永井野の豊年踊り（永井野甚句）	永井野
9	高橋の虫送り	尾　岐	23	四万八千日大祭	福生寺・弘安寺他
10	佐布川の早乙女踊り	佐布川			
11	へびの御年始	雀　林	24	薬師如来のご開帳	常福院・鳳来寺
12	愛宕神社祭礼	高　田			
13	姥神様（おんばさま）祭礼	高　田	25	庚申講	米　沢
14	二百十日の宵祭り	旭池ノ端・沖中田他			



関連文化財の位置